

大きな字で読みやすい

浄土真宗 やわらか法話 2

やわらか法話 2 ・ 目次

故人の想い出に聞く	〔浅井 成海〕	6
お念仏の響いている病院	〔宮崎 幸枝〕	13
「南無阿弥陀仏」の如来さま	〔小林 顯英〕	21
お慈悲の仏さま	〔満井 秀城〕	29
光明に照らされて	〔藤井 静蕉〕	37
角のある念珠	〔靈山 勝海〕	45
エスニックは激辛？	〔花岡 静人〕	52
聞法は問法	〔高橋 哲了〕	59
本当の親―無数の縁―	〔永江 雅俊〕	67
暁になるがごとし	〔藤澤 信照〕	75
借景人間	〔松野尾慈音〕	82
大いなるはたらき	〔藤田 徹文〕	89

故人の思い出に聞く

浅井成海（龍谷大学名誉教授）

親鸞聖人が吉水の草庵に法然聖人をお訪ねになられたのは、親鸞聖人が二十九歳の時でした。お二人は四十歳違いでしたから、法然聖人が六十九歳の時のことでした。

法然聖人の主著『選択本願念仏集』は、聖人が六十六歳の時の成立ですから、み教えの要がまとめられて間もなく、親鸞聖人はこ

の主著を書写することを許されています。またその後、法然聖人のお姿を写すことも許されています。

親鸞聖人にとっては忘れることのできない事柄が『教行信証』の後序にまとめられています。

また、親鸞聖人が八十八歳の時、乗信房にあてたお手紙の中に、故法然聖人の仰せとして、

浄土宗の人は愚者になりて往生す
（『註釈版聖典』七七一頁）

と書いておられます。

親鸞聖人が法然聖人と生き別れとなられたのは三十五歳の時ですから、すでに五十年余りもたっていました。

しかし、八十八歳とられてなお、いきいきと法然聖人の言行を記録しておられるということは、常に法然聖人に遇い続けられたのだと言えましょう。

お念仏ねんぶつ申し、お念仏に聞くとところに、常に故人と会話し、出遇であつていかれたとみることができません。

「お念仏に聞く」とは何を聞かせていただくことでしょうか。

善導ぜんどう大師のお言葉に「二河白道にがびやくどう」のたとえがあります。それは、お釈迦しやくかさまと阿弥陀あみださまのお勧めによって「浄土のみ教えを依りど

ころとせよ」と喚よびかけてくださることなのです。また、み仏さまの大慈悲だいじひ心に遇い、み仏さまが私に尽くしてくださいるいろいろな手だてをお教おしやえくださることなのです。

親鸞聖人はお念仏の喚び声の中に、法然聖人の言行と出遇であつていかれました。そして、法然聖人は阿弥陀さまの化身けしんで、勢至菩薩せいしぼさつが法然聖人となって私にみ教えを伝えてくださった、と受けとめられたのでした。

最近、同居しておられたお義母かあさんを亡くされた方から、「長年生活をともにしてきましたので、義母の思い出は尽きません。浄土真宗では義母が私たちのところに還かえってきて、私たちを導いてくだ